

ふるさとドローン

(介護施設老人の為の生き生きふるさと映像提供仕組みづくり)

★ 夢 ～ 実現したいこと

故郷を遠く離れ都会の介護施設に住む多くの高齢者に、故郷の四季折々の映像を見ていただくことにより、本人が心安らぎ、生き生きと暮らせるようになること

今 ～ 世の中の状況

①田舎の独居老人の増加

世界史に前例のないスピードで高齢化が進み、1994年に“高齢社会(高齢化率7%超)”へ、2015年には“超高齢化社会(同21%超)”へ突入した日本。

団塊世代が全員75才以上になる2024年には、少子化も相まって、国民の3人に1人は65歳以上の高齢者となり、“都会で暮らす子供”と“故郷(田舎)で暮らす独居老人”という地域構造が、ますます固くなってくると予想されます。



②都会の介護施設への移住者の増加

田舎の独居老人の高齢化が進み、生活に支障をきたすようになると、田舎の介護施設は満杯で順番待ちなので、少し高額ですが、子供が暮らす都会の(まだ定員まで余裕がある)介護施設を選び移住してくるケースが、多くなってきます。実際、昨年の熊本震災後に、熊本や大分の両県から多くの老人が、福岡市周辺の介護施設に移ってきたそうです。

③都会の介護施設での暮らし

都会の介護施設に入居した老人の多くは、手厚い介護と新しい隣人との出会いの中で、次第に快適な暮らしを送れるようになります(おばあちゃんの方が、圧倒的に早く慣れるそうです)。子供や孫とも頻繁に会えるようになります。

ただし男女を問わず、多くの老人が生まれ育った故郷への思い、「ひと時でもよいから、直接この目で風景を見たい。」という思いを、いつまでも持ち続けるのは、想像に難くないところです。

ただ、体力的にも物理的にも、故郷に帰ることが難しいという現実があります。

で、思い出したのは・・・

直轄・O川ダム(九州・O県)の湛水地域内で、当時、水没・移転予定であった(その後、実際に移転した)集落の各家屋を、一軒ごと庭に集まっていた家族とともに空撮、編集し、各家族に提供した記録ビデオ。

これをヒントに!⇒ 次頁に続く。

★ アイデア ～ 実現する手立て

1. “生き生き空撮隊”の結成

サポート・チーム“生き生き空撮隊”を結成します。
メンバーのイメージは以下の通りです。

- ・リーダー：老人の気持ち、田舎が少し分かる人
- ・空撮隊長：ドローン技能者、手続きに詳しい人
- ・助手①：元気がある人、若手
- ・助手②：元気がもっとある人

2. 介護施設への主旨説明⇒3. 老人・家族への説明会

福岡市周辺で、このアイデア実現に適した介護施設を探します。“適した”の判断は難しいですが、遠方からの入居者が多い、新しい施設が相応しいと思います。リーダー、助手①の2名で、施設管理者（館長？）にアイデアの主旨などを、根気強く説明し、“OK！”をいただきます。目的は、入居しているおじいちゃん、おばあちゃんに、上映会で喜んでいただくことです。

次のステップで、家族を含めて説明し、希望者を募ります。大勢になると大変ですが、その場合は1次募集、2次募集に分けて実施します。

それぞれの方に、思い出情報（人、場所、暮らしなど）も提供していただきます。

4. 準備⇒ドローン撮影⇒編集 ⇒5. 介護施設への報告

手続きに慣れた空撮隊長の下、関係機関への申請手続きを済ませ、機材等を準備し、いざ出陣！ 予めいただいた思い出情報を抛り所に、様々な角度からゆかりの景色（家、道、畑、田んぼ、川、学校・・・）を撮影していきます。よければ近所の人にも撮影させていただきます。1泊2日程度の行程。この結果を、介護施設へ報告します。

6. 上映会（施設イベント）

介護施設のホールで、“皆さん”に集まっていただき、編集したドローン映像の映写会を開催します。施設入居の皆さん、そのご家族、施設介護士の皆さんが、“皆さん”です。思い出情報をご本人から説明していただければベストですが、叶わない場合は、ご家族でもよいし、“生き生き空撮隊”でもベターです。

自分が暮らした家や周辺を空中から見る景色で、会話が弾み、集まった皆さんに何らかの活力が生まれれば、ミッション完了～夢の実現～です。

最後に） いつのまにか、これって、ドローンを活用した 思い出ナビ・介護施設編 に思えてきました・・・が、とにかく、おじいちゃん、おばあちゃんが喜んで、生き生きと暮らせるようになる仕組みが実現できれば！

